第３回新町建設計画小委員会におけるワークショップのまとめ

【産業建設分科会】

課題の柱１：「自然環境の維持管理」について

● **農地、河川、山林の 3 つが論点**

・ ワークショップでは、「農地の荒廃、休耕田の増加」「河川の水質悪化、水量減少」「山林の荒廃」の３つが議論の柱となった。

● **農地の荒廃、休耕田の増加に関すること**

・ 各地域の状況として、田畑の荒廃や休耕田の増加が見受けられることが報告された。
・ その要因としては、子どもの頃から農作業に親しんでいない若者層が、農業以外の職を求めて町外に流出していることや、農作物の価格低下により採算性が確保できず、耕作放棄等の状況が進んでいることが挙げられている。
・ このため、学校での農作業体験の推進や、若者層が農業に係わりながら地域に定住できる環境づくり、さらには都市住民との交流を通じた休耕田などの活用（貸農園など）や、現在も行われているグループ活動の場としての農地の活用等について提案が行われている。

● **河川の水質悪化、水量減少に関すること**

・ 越知川、猪篠川等の河川の汚れが見受けられることに加え、水量が減少するなど安定していないことが指摘された。
・ 水質悪化に関しては、生活排水等の放流が一部見受けられることや、自然そのものの持つ浄化作用が低下してきていることが要因として挙げられた。
・ 水量については上流のダム建設が要因となっており、水害対策のための水量調整機能と、ありのままの自然の保全とのどちらを優先すべきかといった議論が行われた。
・ これらに対し、放流先での各種浄化機能の強化や、各集落での河川美化活動の実施、さらにはダムの運用による効果的な水量調整の実施などが提案された。

● **山林の荒廃に関すること**

・ 人工林が多く、広葉樹林や雑木林が減少していること、また人工林についても間伐等の維持管理が十分に行えていない状況が挙げられた。
・ その要因として、生活様式の変化による木材需要、木材価格の低下が、従事者の減少、共同意識の低下につながり、間伐等の労務を十分に行えないことが挙げられた。
・ これらに対し、森林ボランティアとの連携による、植樹や森づくり、間伐作業等への住民の参画を呼びかけ、山林の魅力を訴えかけていくことや、木材資源の利用促進、林道の整備による作業環境の向上などが提案されている。

課題の柱２：「産業の担い手確保」について

● **基幹産業の変化、第１次産業の担い手減少、農政に対する姿勢の３つが論点**

・ ワークショップでは、「基幹産業の変化」「第１次産業の担い手減少」「農林行政に対する姿勢」の３つが議論の柱となった。

● **基幹産業の変化に関すること**

・ 農業や林業などの第１次産業に対する、地域の基幹産業としての認識が低下してきていることや、地域内において、勤務先となる企業や雇用の場が少ないこと等が実情として挙げられた。

・ 一方、農業、林業に替わる新たな基幹産業が不足していることが挙げられ、地域の特性を再検討し、町としての基幹産業の構築が必要であるとの考え方が示された。

● **第１次産業の担い手減少に関すること**

・ 農業、林業ともに従事者の高齢化や、担い手が減少していること、またそれに伴い生産環境が変化してきていること等が挙げられた。

・ その要因としては、農産物、木材ともに自由競争等による価格の低下の影響を受け、採算性が確保できない状況になってきており、また労働の厳しさなどから若者の農業、林業離れが進んでいることが挙げられた。

・ 農業、林業ともに、生産環境や競争力の向上に向けては、個々の従事者の取り組みのみでは限界があり、組合等の組織強化が必要であることが提案されている。

・ また、生産物の価格低下に対しては、商品のブランド化や、より効率的な作業環境の確保などが必要であることが提案されている。

● **農林行政に対する姿勢**

・ 行政内部における第１次産業の振興に関する取り組みの姿勢が縦割り的であり、行政が一体となった振興の取り組みが不足しているのではないかとの指摘があった。

・ このため、住民と行政が良きパートナーとなって、この様な重要な課題に取り組む関係づくりや、行政からの支援対策の実施が必要ではとの提案が行われた。

課題の柱３：「個々の観光地やイベントどうしの連携」について

● **観光施設の特色・連携不足、イベントへの参加意識の低迷の２つの論点**

・ ワークショップでは、「観光施設の特色・連携不足」「イベントへの参加意識の低迷」２つが議論の柱となった。

● **観光施設の特色・連携不足に関すること**

・ 町内観光施設の来客数が伸び悩んでいる要因として、類似施設の分散配置や、施設や組織間の連携が行われていないことが挙げられた。
・ また観光ルートが不明確であることや、宿泊を含め長時間地域に滞在する観光形態になっていないとの指摘も寄せられている。
・ このため、利用者のニーズを踏まえた各施設の適切な更新や、観光協会等の組織強化に加え、住民や職員１人１人が互いに連携・協力しながら地域の環境を良くし、来訪者をもてなす気持ちで迎えることの大切さなどが話し合われた。
・ さらに、観光地の巡回を促すためには、観光ルート及び手段の確立に加え、両町間を結ぶトンネルの整備などハード、ソフト両面からのアプローチが必要であるとの提案が行われている。

● **イベントへの参加意識の低迷**

・ イベントについては、開催しても他地域住民からの参加者が少なく、交流があまり生まれていないという状況が報告されました。
・ その一方で、ほたる祭りやグリーンカーニバル、すすき祭りや山焼きなど、特色あるイベントも開催されています。
・ このため、まずは町内の住民自身が積極的にイベント等に参加し、その良さを外部にもＰＲしていくことや、都市住民に対して「田舎」を強調した企画内容を検討することなどが提案された。

その他の課題

※上記３つの課題の柱に当てはまらないものとして以下のような課題が挙げられました

● **商工業に関すること**

・ 工業団地の建設、企業誘致が地域活力の向上にあまり寄与していないのではないか。
・ 公共工事等の地域業者への発注や、地元産品を地元で購買するといった、地域内での経済循環が行われていない。地産地消をはじめとした、地元産業の育成につながる取り組みが必要ではないか。

● **道路交通に関すること**

・ 高速運転する自動車が増えてきていることから、車線の拡幅が必要な路線があるのではないか。
・ 巡回バスの利用者数が少ないことから、利用者のニーズを確認し、運行区間の拡大や駅など主要目的地との直通運行を図るなど、運行形態の見直しが必要ではないか。

【民生・福祉分科会】

課題の柱１：「高齢者の生きがいづくり」について

● **全体を通して**

・ 他のテーマに比べて、非常に多くの意見・コメントが寄せられた。当地域で高齢化が進んでおり、危機感や関心の高さがうかがえる。

● **交通問題に関すること**

・ 高齢者の日常において、通院や買物の際の移動が不便であるという意見が寄せられた。
・ それらの要因としては、「身近な医療施設等が少ない」ことや、「公共交通機関の少なさ、料金の高さ」などが指摘された。

● **高齢者の活動に関すること**

・ 現状として、高齢者が参加できるような地域活動や元気な高齢者が活躍できるような機会と場、また世代間の交流などが、住んでいる地域に少なくなってきている。
・ これらの要因としては、活動場所となる公共施設のバリアフリー化が遅れていることや、活動の場と機会が少ないこと、地域住民の理解不足や意識の低下などが指摘された。

● **一人暮らし老人に関すること**

・ 高齢化の進行に伴い、当地域にも一人暮らし、夫婦だけの老人世帯が増えてきている。また、寝たきりの高齢者も多くみられる。
・ この要因としては、若い世代が地域にいないため、老人世帯の増加につながっている。また、寝たきりや家にこもってしまう高齢者については、地域とのつながりが希薄になっていることが要因として指摘された。

● **改善のための取り組みに関すること**

・ 前回のワークショップでは、時間の関係もあり、課題を改善するための取り組みについては特に触れることができなかったが、意見としてふせん紙には多く書き込まれていた。
・ 特に、高齢者の生きがいづくりに関わる活動の機会と場を、より一層充実させていくことや、公共交通、公共施設を高齢者が利用しやすいように工夫することについて、多くの意見が寄せられていた。

課題の柱２：「若年層の流出抑制」について

● **全体を通して**

・ 若者が外に出てしまうこと自体が大きな課題である。このテーマでは、なぜ若者が出て行ってしまっているのか、その要因を探ることから始まっている。そのため、それぞれのテーマがそれぞれに関係しあっている。

● **働く場所に関すること**

・ 最も多くあげられたのが、若者の働く場所がないということであった。外の大学に通い、卒業したらそのままその場所で就職している。
・ その要因としては、やはり地場産業、地域内の産業が衰退していることがあげられる。
・ 解決策としては、地場産業の振興を図ることと、受け皿となる新しい産業を創出していくことが重要である。

● **まちの魅力に関すること**

・ 若者が住みたくなるような「まちの魅力」が足りないのでは、という意見があげられた。
・ その要因としては、若者が魅力を感じるようなお店や活動の場が少ないことや、自然が多い当地域の本当の魅力を知らないことが指摘された。

● **子育てに関すること**

・ 少子化という問題自体、若者が地域に少ない要因となっている。また、子どもの預け場所が少ないなど、子育ての支援も不足している。
・ 少子化については、子育て環境が整っていないため、安心して子どもが産めないなどの要因があげられた。また、保育料が高い、身近なところに施設がないなど、子育て支援サービスに対する不満もでている。

● **核家族化と住宅に関すること**

・ これらのことと関連して、核家族化が進んでいることも指摘された。
・ これについては、そのような同居を望まない世帯が住むことができる場所、公営住宅の少なさが指摘された。そのために、外に出て、住むところを探している人もいる。

● **取り組みに関すること**

・ ここでも取り組みについては議論することができなかったが、意見として、産業の振興を図ることや、子育て支援の施策の充実、まちの賑わいや活気の創出、住宅などの定住基盤の整備をすすめる、などがあげられている。

課題の柱３：「すべての人の安全・安心の確保」について

● **全体を通して**

・ 消防、防災、に関する意見が多く出された。特に、地域の防災体制については、委員の関心の高さがうかがえた。

● **消防団に関すること**

・ 消防団員が不足しており、消防団が弱体化している現状である。
・ その要因としては、先のテーマであげられた若者が少ないこと、地域内で働いている人が少ないこと、などが指摘された。

● **地域の防災体制に関すること**

・ 地域の防災体制が不十分である、という意見が多く寄せられた。訓練は行われているが、まだ住民の意識が低い現状である。
・ その要因としては、大きな災害に遭遇していない人が多いため、危機感や意識が低くなっているという指摘があった。

● **情報伝達、救急・消防車に関すること**

・ 緊急時に地域内の情報伝達が遅い、救急車、消防車の到着が遅い地域がある、などの意見が出された。
・ 要因については、緊急時用の有線放送が整備されてない家や、外出しているなど、情報設備が充分でないことが指摘された。また、救急車・消防車に関しては、出張所が遠いため、到着に時間がかかっている。
・ これらを改善する取り組みとして、情報伝達に関してはCATVを活用するなどの意見が出された。

● **防犯に関すること**

・ 悪徳商法等、特に高齢者などをターゲットにした犯罪が地域内でも起こっている。
・ その要因としては、もともと安全な地域だったため、意識が低い。
・ 改善策として、地域内のつながりを強化し、近所同士でのコミュニケーションを充実させていくことがだいじなのでは、という意見が出された。

● **取り組みに関すること**

・ 特に、防災・防犯に関しては、地域のつながりを強化し、緊急時に助け合い、支えあえる体制づくりが重要であるという意見が多かった。

【総務文教分科会】

課題の柱１：「地域社会での生きがい」について

● **２つの論点**

・ ワークショップでは、「活動内容に関すること」と、「施設整備に関すること」の大きく２つの議論があった。

● **活動内容に関すること**

・ 「活動内容に関すること」については、校区単位、小学校区単位でのスポーツ活動が充実してきており、文化活動についても数多くのサークルが活動し交流が進んでいるとのことであった。

・ しかし、新しい参加者を受け入れようとする意識や、スケジュールの工夫によって参加できる人を増やそうとする意識が低く、閉鎖的で硬直的な組織が多いとの指摘もある。参加する人とそうでない人のギャップが大きいようである。

・ このため、各世代が参加できるようなスケジュール調整やだれもが参加できるような工夫を行うほか、交流・参加しやすい組織づくりを進めていく必要性があげられている。

● **施設整備に関すること**

・ 「施設整備に関すること」については、施設はそれなりに整備されているが、老朽化の問題やアクセス性が不便、特色がない、施設はあってもＰＲされていないなどの問題点があげられている。

・ このため、わざわざ利用したくなるような特色付けや広報・ＰＲを進めていくほか、老朽化施設の今後の維持管理費用を考えた場合、幼児施設など新しいニーズにあった施設や工夫をこらした施設に転換していくことも検討すべきとの提案もされている。

課題の柱２：「住民の主体的なまちづくりへの参画」について

● **町全体としての住民参画をどう進めるかが課題**

・ 集落単位の住民参画は機能しているが、町全体に係る案件に対して対応ができていないほか、「住民参画に特色がない」、「広報不足、働きかけ不足」との声も多い。

・ 集落単位の活動も、財政の問題が大きな課題となっており、集落による格差も大きい。

● **行政主導から住民主体のまちづくりへ**

・ 上記の問題はこれまで、行政主体のまちづくりが進められてきた弊害であるとの指摘もあるが、住民の無関心さも問題であるとの認識も強い。

・ このため、今後は広域的な問題に対応できる組織化を図り、行政はアドバイザーに徹して住民に権限委譲をしていくことが重要である。

・ 集落の格差是正に対しては、集落合併も含めて標準化するようなシステムの検討や、住民広報についてはＫ－ＮＥＴの有効活用なども有効と考えられる。

● **求められる住民活動や組織等のあり方に関すること**

・ 具体的な住民参画としては、特色・特産を生かした独自性のある活動をしていく必要があり、各自治会ごとに競争原理を導入するなどの仕組みも重要である。

・ 今後はまちの意志を育てる「まちづくり」を進め、権限委譲を進めていくほか、地域の枠を越えた組織づくりと行政との連携を進めていく必要がある。

● **これからの住民啓発・広報に関すること**

・ これからは、今なぜまちづくりへの参加が必要なのかを広報することが重要である。

・ また、ただ広報するのではなく、「新しいまちづくりのポイントをＰＲ」して、意見や参画を得るようにすることが大切である。

課題の柱３：「子どもたちの教育に係る学校・家庭・地域の連携」について

● **少子化による様々な地域への影響**

- 少子化による地域への影響は大きく、特に「教育レベルの低下」「人間形成への影響の問題」などこの２つが深刻である。
- 少子化による子ども同士の遊びが減少した結果、「自然の中における遊び体験」や「体を使った遊びも」少なくなってきている。

● **教育レベルの低下に関すること**

- 教育レベルの低下は、少子化で中のよい子どもが増え、競争力がなく自立心のない子どもが増えていることや、ゆとり教育のもと基礎学力が低下していることが原因。
- このため両町の教育レベルの低下が著しい。
- 学力充実のためには、教育支出を惜しむべきではない。
- 教育施設については、不便老朽なものを整備するにあたり画一的な整備を避ける必要がある。
- 小学校の統廃合については、合併によりスムーズな統合を行い、児童数の増加によって、各自の競争力が高まり学力向上や社会への順応性が高まることに期待する。

● **人間形成への影響の問題に関すること**

- 家庭内の親と子のひずみやマナーの問題、犯罪などは、そこに住む人たちの心の問題、傍観者的な態度が要因となっている。
- このため、地域との関り、コミュニケーションが重要であり、親と教師との連携、家庭と警察との連携、高校生と地域とのふれあい、子どもとお年寄りとの交流など、様々な交流・連携が重要であり、地域全体で子どもたちを育てていく必要がある。

● **特色ある学校づくりの発展・活用**

- 少子化等による課題を多く抱えている一方で、山村留学など特色ある学校づくりが進められている。
- しかし、今後継続困難な状況もあるが、特色ある地域づくりや学校づくりにあたっては、これを維持・発展させていくことが望まれる。
- また、山村留学だけではなく、都会に出て刺激を受ける都会留学があってもよい。

以上

（参考）ワークショップ　作業シートの整理

【産業・建設分科会】

課題の柱１．自然環境の維持管理

①各地域におけるより具体的な状況

○農地に休耕田や荒れた状態が目立つ

- 田畑など高齢化により耕作できなくなり、荒れた状態の場所も増えてきている。
- 休耕田、畑が多くなってきている。（収穫後の田畑の活用ができていない）
- 山間地では、いのしし、猿、鹿などに田畑を荒らされる。

○水質の汚れが目立つ

- 越智川、稲篠川等河川の汚れが目立つ。
- 魚や生物が少なくなってきている様に感じる。
- 川魚が育たない。

○河川の水量減少

- 河川及び河川敷の整備が不十分。
- 河川の氾濫、水量の激減がみられる。
- 河川の水量減少。
- 水量が安定していない。水量の多い時は一気に流れてしまい水量が少なくなるとよどんでしまう所がある。

○自然、動植物の減少

- 山林における巨木や広葉樹の減少。
- 人工造林が多い。雑木、下草が少ない。
- 雑木林が少ない。野生の生息生物が少ないのではと思う。（猪や鹿は多いと思う）
- 杉、桧木立の中に遊歩道があったが、乱開発により通行止めになったり、またその土石が川に流れ込んで整備されないままになっている。
- ホタルの減少。（処理場付近）

○山林の維持管理の遅れ

- 年２回のクリーン作戦（草刈作業を含む）及び山林作業道の草刈り、２年毎の間材作業等を実施している。生活様式の多様化及び個々の問題意識が異なるため、取り組み方が消極的である。
- 私有林は山林持主が自分で間伐され、部落林においては森林組合において間伐している。自然環境を保つため、梅林運営に集落事業として取り組んでいる。
- 人工林の間伐の遅れ。
- 山林の間伐や枝打ちが不十分である。

②現状のような課題を有している要因

○農業従事者の不足
○農業の採算性の低下

- 子供のころから農作業に親しんでいない。
- 昭和４０年頃よりの経済の発展に伴い、田舎には親を残し、若い人は町に出て行った事と教育の変化による。
- 若者の町外流出。
- 好景気でいろいろな施設開発。
- 採算作物が少ない。
- 農作物を作るより買うほうが安くなっている。

○住民意識の低下
○自然浄化作用の低下

- 川は投棄場所の意識がある。
- 生活排水放流による水質の問題が見られる。
- 自然の浄化作用がなくなってきている。

○ダムの建設

- 水量の減少はダムの建設による。

- 水害対策と自保の保全とどちらを優先するか。

○材価の低迷
○生活様式や意識の変化

- 採算性を先に考えてしまう。原木の安値と体の労費に対し、利益が割りに合わない。
- 生活様式の変化に伴う将来の生活設計に対する不安。
- 地域住民同志の協同意識の低下。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○若者・都市住民への開放

- 若者たちが住める環境づくり。（生活環境整備）
- 都市との交流を通じて、休耕田などの整備・活用を行う。
- 都会の人々に貸農園制度などで提供する。
- 学校で農作業を体験させて作る喜び、楽しさ、健康面を教える。

○グループ活動としての利活用の促進

- 男性にはグループ共同の畑を耕してもらったり、テント張りをお願いしている。月１回は青空市を開いて地元の人々また観光客とも交流を深めてゆきたいと思っている。
- 活動グループとして山裾の畑にこんにゃく芋を植え、こんにゃくだまを生産する生芋を確保してゆきたい。（猿はこんにゃく芋は食べない）
- 定年後グループで野菜作りをするのに活用。

○生活排水の浄化

- 放流末最終桝に炭を入れる。
- 浄化槽放流先に三次処理槽を設置する。
- 集落単位での河川奉仕作業の実施。

○ダムの効果的運用

- 河川に調整ダムを設ける。河川水が一気に流れてしまうのを防ぐため。

○雑木の植樹

- 浅木（雑木）の植込みをする。
- 巨木、広葉樹の保全。
- 森林ボランティア等との連携による、広葉樹など「森」づくりへの参加。

○間伐材の利活用
○作業体験の場づくり

- 山林作業の楽しさ健康面についての良さを知ってもらい、ボランティアを推進する。（保険、弁当代、少額の手当程度の支給。安全教育もする。）
- 間伐の推進。（間伐搬出経費助成制度の新設）
- 公共施設の木質化。
- 林道、作業道の建設。

○各団体・行政・住民の協力による取り組み

- 安定した家族生活ができる様、可能な対策を行政が第一に考え支援する。
- 森林組合、町、ＪＡなどが共にアイデアを出し合って、地域住民が共に参加してお金になることを考えるようにしていけばよい。（現状ではＪＡにはあまり期待はできない。）

【産業・建設分科会】

課題の柱２．産業の担い手確保

①各地域におけるより具体的な状況

○基幹産業の変化

- 集落における人口の減少の大きな要因の一つは、勤務先となる企業や生活基盤となる産業が地域内に少ない。
- 両町の基幹産業が農林業であるというイメージはほかに基幹となる産業がないからで、将来的に農林業を基幹産業と望む人は多いのか疑問である。
- 農業、林業とも現状では振興は図りにくい。
- 住民ニーズの産業誘致や産業振興が行われていない。
- 産業の空洞化が随所にみられる。（全ての産業についてである）

○担い手の不足・高齢化

- 従業員の高齢化。
- 生活のあり方が昔と大きくことなり、肉体的な仕事をしなくなった。また木材の低価などで生活そのものが成り立たない。また営農面においても収入的に問題が大きい。
- 担い手不足。
- 少子高齢化による労働力不足。

○指導者不足

- 指導者の不足。

○生産環境の変化

- 間伐等が行えず、管理が不十分な山林がふえている。
- 耕作放棄田、荒地の増加がみられる。
- 宅地への転用がすすむ。

- 農業においては、ほ場整備もすすみ、環境整備は整っていると思う。

○価格の低下

- 木材の値段の下落。
- 現状では木材価格の低迷及び、労働条件等により、担い手が確保ができているとは思わない。

○農林行政への不満

- 農林業の振興が図られるものの、生活基盤とはならず、また行政も優良農地を他の目的に使用。施策に論理性が希薄。
- 役場の担当課に相談に行くことがあるが、課内でのコミュニケーションがうまくいってなくて、気分を悪くすることがある。

②現状のような課題を有している要因

○需要の変化への対応の遅れ

- 社会基盤と同様に経済基盤の確立維持は重要であるが、取組みが遅れている。
- 農林業関連事業の需要の減少と外国参品の増加により、事業が衰退し、経営姿勢が後退したため。

○後継者の育成が不十分
○作業がきつい

- 農林業への策は施されているものの、社会変化に応じた対応が十分でなく事業としてまた後継者定着まで至っていない。
- 子供達が山の魅力価値を知らない。
- 労働の３Ｋが従事者をなくした。

○価格の低下
○手が回らない

- 農作物価格の低迷、就農意欲の減退。
- 木材価格の低迷等により間伐作業・下刈りなど、山の管理に手がまわらなくなった。
- 地域的にみて農地は整備されたが、米以外の作物にはあまり向いていない。町南部と北部とでは温度差などにも違いがあり、北部において冬場は何もできない。山林労働においても、木材低下で現状では前向きに取り組めない。

○海外からの輸入・自由競争

- いまだ大量生産、大量消費を助長する様々な世の中の傾向が大きく、また貿易の自由化等、ものに対する考え方は安易である。偏った自由競争が横行し、富める者が有利な資本社会になっている。
- 海外からの輸入。
- 建築物の変化。

○行政内部の横のつながりがない

- 農政、林政の一体性に欠ける。
- 行政の地域産業の育成に偏りがあり、地域経済活性化における産業育成が充分な施策として行われてなかった。
- ただ自分の係だけの仕事をこなしたら良いと思っている。
- 直属のグループ同士の集まりもなく、研修もない。横のつながりがない。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○新たな産業・育成

- 地域の特性を再検討し、町の基幹産業を構築する（我が町のイメージ）

○農業の担い手確保のための組織づくり

- 農業法人化。
- リーダーの育成。
- 営農組合組織の強化。
- 専用農家の育成。

○林業の組織強化

- 林業事業体の組織強化。

○ブランド化
○付加価値

- 特産品開発。
- 差別化。（ブランド化）
- 農林業を事業ベースにするため、付加価値を高める。（観光との融合を図る地域全体での販売促進、高品質、品種等の改良開発へ積極的助成）

○作業の効率化

- 山林の維持・管理のため、広域林道・作業道の開設（補助）が必要。

○行政支援策の充実

- 土地利用整備計画や産業育成、活性化を具体的に実現する。
- 過去の農林業の行政を洗い直し、前期・中期・後期にわけた支援対策を実施し、価格等競争できるようバックアップする。

○住民行政のﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟの取り組み

- 町づくりに取り組んだり、特産品づくりを研究しているグループのつながりを密にし、役場職員も腰をすえて話し合う機会をもってほしい！行政と住民がより良きパートナーになれたら最高です。
- 先進地視察という研修がありますが、行っただけ、見ただけではなく、後の意見交換。自分の住んでいる町との比較。「何故」を追求していくべきだと思う。

【産業・建設分科会】

課題の柱３．個々の観光地やイベントどうしの連携

①各地域におけるより具体的な状況

○施設の魅力・整備の不足

- 町内観光施設の来客者が少なく、経営収支が良くないのではないか。
- グリーンエコー、ヨーデルの森、施設の整備の充実を考えるべき。
- 料理のメニューに新鮮さがない。

○施設間の連携不足

- お互いが案内できるような連携がとれていない。
- 事前の情報公開がない。
- 県内の有名な観光地への途中で寄り道的な感じがする。
- 観光レクリエーション施設が立地しているが、運営体制や地域との連携が不充分であり、資本投下に比べ、機能がなされていない。（無駄が多い）
- 各施設間の連携不足。

○イベントの住民の参加意識の低迷

- イベントを行っていますが、地元と他地域からの参加者との交流が少ない。
- 現在、大河内町内で行われているイベントまた宿泊施設など町内の方々の参加がとても少ない。

- 長谷校区では、約 10 年前から毎年６月にほたる祭が開催されていますが、大河内町では５月にグリーンカーニバルが開催されています。外に砥峰高原、春の山麓、秋の観月祭、すすき祭があります。

○職員の資質の問題

- 観光地で働いている人の接客態度が気になります

②現状のような課題を有している要因

○施設の特色不足

- 町の規模の割りに観光施設が多く、分散・設置されている。
- 同施設の乱立
- バブル社会の後遺症がいまだ影響し、施設は乱立。遊びは経済的なこともあり、アウトドアのような傾向がある。
- 長時間滞在するなどの観光施設ではない。

○組織機能連携不足

- 峰山高原ホテルやモンテローザにおいても近くに２～３時間でも遊べる所がない。もう少しそれらの環境整備があると良いと思う。また今後においては、神崎町の施設とのかねあいが大事である。
- ばら撒き予算が生んだ魅力のない地域間競争の激化。そのため協調性がなく、自分の地域だけという感覚が芽生えた。
- 組織の確立がなされていない。
- 観光協会の活動資金が不足している。
- 観光ルートが不明確である。

○理解促進への対応不足

- イベントを行っている者だけの事で感心がない。文句を言うだけ。参加しなくてもいいから足をひっぱらないでほしい。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○利用者ニーズを踏まえた整備と運営

- 施設間の有機的連携等による来客数、収支改善の道を模索するが、それでも改善の見込めない施設は廃止も検討する。
- 宿泊施設の充実、杉の湯荘の隣か階上に増設する。
- 自然豊かな山野で採れる山菜を旬の食材としてメニューに加えてほしい。（例）山菜の天ぷら、和え物等
- グリーンエコーのプールを温水プールにする。（冬季の利用者を増やすため。）

○横のつながりによる組織化

- 各地域でどのようにすれば美しくなるか協議を重ねて、ボランティアでできることを決め、ひとつづつ実行する。
- 大河内高原や神崎町の観光にこられた方や宿泊された方が、それらのファンになってもらうよう町全体が取り組むこと。
- 観光協会の組織強化

○観光地巡回ルートの整備

- 巡回ルート、手段の確立。
- トンネル整備による両町間のつながりの構築。

○住民や職員一人一人のもてなし

- 広域的なイベントの開催。相互の宿泊施設等の提供
- 現施設は、行政が責任を持って維持管理し、運営については組織に一任し、助言及び町の観光行政の中で積極的な PR 活動を実施する。
- 観光地で働いている人は自分の持ち場だけでなく、他で人で不足なら、素早く対応できる気配りを持ち合わせてほしい。

○「田舎」を強調した施策推進

- イベントを行う際に山の町、海の町、都会と特徴ある物産の交流⇒地域ごと、グループごと、世代ごとの交流につながればよいと思う。
- 田舎町のよさを強調する施策を押しすすめる。

○住民自身の参加促進
○対外的 PR

- イベントに町民が参加してみて、外部に向けての PR をする。
- 地元住民自身が利用する

【産業・建設分科会】

	その他の課題				
①各地域におけるより具体的な状況	・ 工業団地が作られ企業誘致がされているが、地域の期待ほど成果がない。（雇用面、地域への貢献度、税負担面等）	・ 建設、建築、土木などに関連する業者が多いにもかかわらず、公共事業や工事発注が減少し、町内経済が循環せず、また消費も低下している。（地域産業の劣化）	・ 商業全般に売り上げの減少が見られ、経営不振である。	・ 朝・夕ラッシュ時の危険な高速運転がみられる。（事故の恐れあり）	・ 巡回バスの乗車率が低いと感じられる。
②現状のような課題を有している要因		・ 地域住民の地元消費の意識が薄い。 ・ 事業経営者の危機管理対応の遅れや、経営意欲の薄れが地場産業の低迷につながっている。	・ 近隣や町内への大型店の進出や消費の減少により小売店舗が減少。	・ 通行車両の増加と相まって、地区外への通勤・通学がふえた。	・ 通行区間・スピードの面で利用車のニーズに合っていないのではないか。
③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み	・ 優良企業の誘致。（社会貢献意識の高い企業の誘致。）	・ 地産地消を根底に行政施策に取り組む。（地場産業、産品、製造品、工事等は地域優先し、産業育成を図る。）	・ 商業地の整備や複合型商業集積などが必要。	・ 道路の拡幅が必要。（県道は最低２車線が必要。）	・ 利用者のニーズを確認し、運行区間の拡大、駅など主要目的地との直通運行を検討すべき。

【民生・福祉分科会】

課題の柱１．高齢者の生きがいづくり

①各地域におけるより具体的な状況

○交通問題（不便さ）
- 通院・買物の不便さを感じている。
- 地域で交通の利便性が大きく異なる。
- 活動したくとも交通機関の便数が少ない。

○地域活動への参加が少ない
- 共同で行う事業が断続的になっている。継続した日常的に行う域外事業がされていない。
- 健康であるのに、奉仕作業、教養講座、健康づくりなどへの参加が少ない。
- お祭・行事があっても身体が不自由な人の参加は少ない。
- 月１回老人会員とボランティアが一緒になり、ミニデイサービスを行っているが、公民館まで歩いて来れれる方という事で一番出て来てもらいたい方が参加できない。

○元気な高齢者の活用が少ない
- 機能・能力を生かしていない老人がおられる。
- 元気な高齢者が多いと思う。
- 田舎の高齢者は年金で比較的余裕のある生活をしている。
- 高齢者の大部分の方は健康な人が多い。又働く事や趣味の活動学習や教養を高めるため生きがいを感じる高齢者も多い。

○デイサービスの運営に問題がある
- ミニデイサービスが月１回実施されているが、運営に問題がある。

○世代間交流があまりない
- 同居家族でありながら高齢者は別々に生活している家族が見受けられる。又高齢者も気を使ってかあまり外部との接触をしたがらない。
- 高齢者と他の世代間との交流が少ない。

- 痴呆性老人が多くなっている。

○一人暮らし老人が多い
- 一人暮らし老人が増加してきている。
- 半身付随、寝たきりの高齢者が多い。
- 一人暮らし、老人二人暮らしの家族が増えている。
- 集落の中でも小学生以下が一人もいない隣保があります。若者が都会に出て当集落内でも高齢者夫婦のみの家庭もかなりあります。

○生涯学習施設が利用しにくい
- 施設を利用するのに手続き方法がわかりにくい。管理がうるさく何となく利用しにくい。使用料は負担が少なく利用者本位である。施設とは別に生涯学習等の内容は十分満足できる。

○地域の冠婚葬祭が減った
- 自宅から葬式を出す状況が減少している。セレモニーホールの利用者が増加している。

②現状のような課題を有している要因

○公共の交通機関が少ない
○公共交通料金が高い
- 交通機関（本数）の少なさ。利用しにくい点が多い。
- 自家用車が増えて利用者が減少。料金が高い。
- 公共交通に頼りすぎ。気軽に車に乗せてあげるような雰囲気でない。

○公共施設のバリアフリーができていない
○公共事業が少ない
- 神社・集会所等には階段、段差があり、行くことが大変。行っても迷惑になると考えてしまう。
- 道路や店舗、交通機関、公共施設等で利用を妨げる段差等がある。
- 共同でする山仕事がなく、田・畑が機械化され、共同事業の意識が薄れてしまった。
- 参加している方は喜んでもらっているが出て来てくれない人をどうしてひっぱり出すかが問題点として残る。

○活動の場がない
- 高齢者を大切にしすぎである。（仕事を取り上げている）
- ものづくりや地域のために活動できる高齢者は少なくない。
- 自分の能力に応じた社会参加や生きがいづくりを行っている人も多い。

○若年層の減少
○地域のつながりが少ない
- 生活習慣病にかかっていたり、家の中に閉じこもりがち。趣味がない。地域とつながりを持たない。
- 子どもの数が少ない。跡取が都会へ出て行って後継者がいない。
- 高度成長経済の流れの中で子どもを上級学校に入れ、そのまま就職し、家庭を持った事。近郊に若者を受け入れる企業等働く場所がなかった。収入が少なく、体力のいる農業が若者の精神的負担になり、同じサラリーマンでも都市に出る傾向が続いている。

- 我々が日常利用する施設は行政が考え造られたものなので紋切型のものが多くなるのは当然かもしれない。管理がうるさいのは利用者にも責任があり、もっと大事に利用しておれば楽しい施設になったと思います。使用料、学習料はもう少し利用者負担を増やしてもいいのではないでしょうか。

○身近な医療施設が少ない
- 寺前・神崎町まで行かないと病院がない。

○理解不足、意識の低下がある
- 互いに尊重しあう心が乏しいのでは。
- ３世代の交流を家庭や地域で放棄している。

- セレモニーホールの利用増加は、家族構成、民家の構造によるところが大きい。

○デイサービスに資金が不足している
○人手も少ない
- 資金も運営人数も少ない。

- 早めに適切な治療を行っていない。
- 地域社会とつながりを持っていない。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○診療所を増やす
- 診療所を増やす。
- 新田・川上・上小田等の遠距離地域への救急医療体制の充実を図る。

- ミニデイサービスの回数を増やすとともに対象を広げて地域のつながりを深める。
- 月１回ではなく、各組集会所でのミニミニデイサービスを行う。運転ボランティアを募り送り迎えをする。
- 高齢者を話題の中に取り込むために、家族の同意を取ることが大事と思います。その為の教育（高齢者でなく）をしてみては如何？ミニデイサービスは高齢者用ですが、家族の中心におられる方にも勉強会があってもいいのではないでしょうか。

- 高齢者の生きがい。若者層の流出は生活基盤の充実が主題であり、農業・林業を柱とする新しい産業を構築する必要がある。
- 農業・林業に係わる「ものずくり」の館をつくり高齢者の方に管理してもらう。
- 高齢者の豊かな経験や知識を生かした社会参加への支援が必要。
- 水を大切にした「小川の多くさんあるまち」にしたい。小川とは川床は砂利・土、川岸は草の状態である。各集落の山裾、有休地、雑草地に「くぬぎ林」「自然な野原（クローバー、あざみ等）」を作る。この事業を高齢者を指導者として若者が手伝い、子どもに伝える。（クワガタ、カブト虫、魚、野花つみ、シイタケ栽培等）
- 誰でも対等に参加できる機会を設ける。

- 若者の働く場の確保。

- 町ぐるみ健診の受診の強化。生活習慣病の予防の推進。趣味を持ち社会参加をして生きがい作りをする。

- 近所同志助け合い声かけ運動を。

- 施設を傷めたりするから管理がうるさくなり、その跳ね返りがあると思う。住民の「物を大切にする心」を養う学習が必要と思う。行政も財政が逼迫していることもあり、住民負担を少し増やしてもよいのではと思う。

○公共交通機関の整備
- 低床型バスの導入。巡回バス等の導入。
- 料金の値下げ。巡回バスなどによる便数を増やす。

- 痴呆予防の推進。
- 痴呆が進まないような医療ができる機関が必要。
- 痴呆性老人を家庭では見守りがむずかしい現実。グループホームの建設が必要。

○運転ボランティアの保障
- 運転ボランティアへの災害保障の整備
- エコマネーなど

○公共施設のバリアフリー化を図る
- 集落単位で手すりスロープ等の必要な箇所のチェック及び整備。

- 地域毎の公民館・集会場を三世代の交流の場として運営する「しくみ」をつくる。

- 町営のセレモニーホールをつくる必要性が生まれつつある。柏尾の廃パチンコ店を町が買い取りセレモニーホールにしてはどうか。

【民生・福祉分科会】

課題の柱２．若者層の流出抑制

①各地域におけるより具体的な状況

○就職の場が少ない
- 働く所（金もうけする所）が限られている。(少ない）賃金が安い。
- 地域に就業の場が少ない。
- 就職と同時に仕事の場の近くに住む人が多い。
- 働ける場が少ない。雇用求人が無いため、フリーターの子どもが多い。→中山間からの若者の流出がおきている。

- 遠くの大学を出て、そこで就職をして世帯を持ち、当地に帰らない若者が多い。
- 就学後も帰って来ない。
- 昼間、町内にいる若者が少ない。

○町に魅力がない
- 若者層が町に魅力を感じないのか、都市部への憧れが大きい。

○子どもが少ない
- 少子化により子供会の運営が制約されている。（バレーボール、ソフトボールのチームができない）
- 子供の出生率が低い。

- 核家族化が進んでいる。
- 世代間の同居がむずかしい。
- 結婚を期に町外に出てしまう。

○暮らしの情報不足
- 家を建てる際、規制、手続き、税金などのことがよくわからない。

○子育て支援の不足
- 夫婦共働き又は片親家庭は子供の預け場に困っている。
- 神崎に１ヶ所だけ子供の館（きらきら館）があるが近隣の地域の人は利用しやすいが他地区（大山、越知谷）の人は利用しにくい。

○定住不足
- 住むところがない。

②現状のような課題を有している要因

○地場産業の衰退
- 農業・林業については外国から安価な物が輸入されている。

- 町内に働く場がない。
- 就労場所がない。（魅力が薄い）
- 家から通える大学が少ない。地域に働く場が少ない。定住魅力がない。
- 身近にある自然の魅力を若者自身が会得していないので子どもにも教えられないのではないでしょうか。

- 仕事場まで遠い。独立して暮らしてみたいという心境があるのでは。

○お店、活動の場が少ない
- 若年層が魅力を感じる様な店舗、社会活動やスポーツレクリエーション活動の場の不足。
- 自然が多くたくさんあるといっても河川に入りにくい、山に入る必要がない、野原がない、身近に自然がありながらその場所がない。自然に触れる機会が少ないと自然の魅力はわからない。（若者が理解していないのではないか）

- 経済的な理由。
- 安心して子供を生める環境づくりが進んでいないためと考える
- 働く母親が多い。

- 結婚相談所のＰＲ不足。

○意識が低い
- 同居を望まない家族の居住する場が町内にはない。
- 自分の町に愛着がない。家族としての一員としての認識が昔と比較して少ない。

- 制度等が複雑である。

○公営住宅が少ない
- 土地の規制がきびしい。公営住宅が少ない。

○身近な施設が少ない
○場所によってサービスが受けられない
- 保育料が高い。
- 寺前保育所は延長保育・午後保育が有るが、長谷、南小田方面の子供は利用しにくい。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○一次産業の振興
- 農林業の活性化を図る。(金儲けになる産業を振興する）
- 農林業振興地域の規制緩和。

○新産業の創出
- 工場誘致に力を入れてほしい。

- Ｕ字溝の入っていない「小川」、クローバー等の野花があって花つみができる「野原」そして「くぬぎ林」の３点を若者の力で作れば自分自身が作ったことで大切にすると考えます。
- 自然を生かしたレクリエーション活動、整備の支援。
- 多種にわたる店舗、企業、大学（専門学校等）の誘致。産業開発。
- カジノを町営で建設する。
- 都会志向を見直す。
- 若者に合った環境の整備
- 自分の町が子や孫に誇れる町になるような教育を行う。（学校、地域、行政）

- 安心して子供を生み育てられるような環境にする。
- 小学校区に安心して子供を預けられる場所の設置を。児童館（空教室利用）
- 放課後保育のできる場所作りをする。各地域で見守り場所があり、働いて帰りに子供を迎えに行く様なところが必要である。集会所、公民館の利用。
- 産業・文化・自然環境をよくすることにより少子高齢化は解消できる。（安心して生活ができる地域をつくる）
- 住宅施策（定期借地権付等）の充実。低廉は価格の分譲地の確保。

- 若者が住めるように（安いマンション等）住宅の整備が必要。
- 若者のニーズにあった公営住宅、ワンルームマンションの建設の促進。
- 住宅を整備してほしい。
- 若者の住宅又二世帯住宅建築への長期の資金融資。

- 専門のアドバイザーを町内に配置する。

【民生・福祉分科会】

課題の柱３．すべての人の安全・安心の確保

①各地域におけるより具体的な状況

○消防団の弱体化
- 災害時（台風・大雨等）の不足の事態に対応できる消防団員の減少。
- 消防団活動の弱体傾向。

○地域の防災体制が不十分
- 様々な訓練を実施したり、防災活動を行ったりしているが、継続性がなく単発で終わっている。
- 集落で避難場所を知らない人が多いと思う。
- ミニ防災訓練が地域ごとに行われているが、十分な訓練になっていない。
- 一人暮らし老人宅の寝室調べを地区消防を通じて民生委員が確認している。
- 地震、ダムの決壊の際にどこにどう避難するのか意思統一されていないのではないでしょうか。
- 住民の中には、まだ行政に言えば何でも解決してもらえると思う気持ちが多い。なぜ自分達がせねばならないのかという意味がわかっていない。

○情報の伝達がおそい
- 緊急時町内いっせいに情報が伝わりにくい。

○救急車・消防車が遅い
- 救急車、消防車が来るのに時間がかかる。
- 病院では救急車を出動させることができない。

○土砂災害の危険性
- 森林の荒廃による土砂災害の危険性。

○防犯意識が薄い
- 悪質商法、電話による商法にひっかかった高齢者
- 防犯意識があまりない。

○子供の安全
- 子供達が安心して自然の中で遊べる場所（山・川 etc）がほとんどない。

- 安全、安心の確保については、かなり充実している。

②現状のような課題を有している要因

- 町内で働いていない。
- 若者が少ない。

○防災意識が薄い
- 防災等安全性へのひとり一人の意識が低い。危機感がない。
- 防災意識が弱い。
- 災害時にどこを探せばいち早く助け出す事ができるかを考えての対策でしょうが、いい事だと考えます。
- 高度成長期から国・県そして市町村にいたるまでの行政に全てまかせてきたことに起因すると思います。
- 大きな災害に遭遇していないからなのかと思う。

- 緊急時有線放送がない家も多くなっている。屋外に出ていたら有線は聞こえない。

- 屋外だとうるさい。

○出張所がない
- 中播北部出張所が他町にある。

- 森林価値の低迷。
- 林業の衰退。

- 従来の防犯の考えのまま。
- 高齢者はすぐ信じてだまさやすい。
- 新しい防犯の知識がない。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

- 自主防災組織を中心とした日頃の防災訓練等の実施。
- 消防団組織の再編。（年齢幅の見直し）
- 昼間消防力の強化が必要。役場職員による私立消防団をおく。
- 消防団の使命を町民一人ひとりが再考する必要がある。

- 防災訓練の今後とも継続し集落間との連携また町全体へと訓練を継続する事が必要。
- 啓発、学習機会をもっと増やす。
- 住民一人ひとりの防火・防災に対する意識の向上をはかる。
- 地震、洪水の際の避難場所を意思統一し、その場所の老人・子供等の誘導を確認すべきと考えます。
- 現在の全てを住民に理解させることが第一です。そのためには、住民集会等で何か例を挙げ意識を持たせるようにしていただきたい。
- 子供から高齢者の方まで幅広く段階的に意識を高め、維持していけるような学習プログラムの作成・実施。

- ＣＡＴＶの活用。

- 出張所の増加、設置。

- 間伐や枝打ち等。
- 森林保全の充実。
- 砂防・治山事業の実施

- 防犯率Ｎｏ１の町をめざす。
- 高齢者２人暮らし、独居老人宅もこれから増加する現状にあり、近所とのコミュニケーションの必要性を考える時、近所の老人、住民が集まる機会をつくり、お互いに近所を気づかう住民作りをしたい。
- 都心部でみられるパトロール隊のボランティアを募る。犬の散歩、ウォーキングをしている人などに腕章をつけてもらって見守りをする。

【総務文教分科会】

課題の柱１．地域社会での生きがい

①各地域におけるより具体的な状況

○活動内容に関すること

■充実している点
- 校区単位でスポーツ 21 を立ち上げ、日を追って充実してきている。
- 各小学校区ごとに２スポーツクラブ 21 が結成され活動中
- 文化活動についても数多くのサークルがあって、互いに交流の楽しさを味わっている。
- 各スポーツ活動、町を主体に考えるのか集落をまたプロジェクトを中心に検討することも必要と思われる。
- 高齢者を中心に施設の利用が増加しているように思う。特に温水プールなど 60 歳～70 歳の人々の利用が進んでいる。

■問題点
- 分化・スポーツサークルの種類内容が不明。（大河内分化協会とか高峰啓太郎氏も知らなかった。

○施設整備に関すること
- スポーツ施設が老朽化している。（特にグリーンエコー笠形のテニスコート）
- 大河内は新しい
- 現存している生涯学習施設、スポーツ交流施設にどんなものがあるのかわからない。

- 施設の**利用頻度が低い**ように思う。
- 年々活発にはなっているが、地域ごと、年代ごと、団体ごとになっている。または**参加者が限られて**いる。

■幼児施設は充実
- 幼児のための施設（きらきら館）は充実している。

アクセスが不便 → ← 特色がない

- どこにでも施設はあるが、インストラクターなど指導者の特色づけが必要

※活動されている方とされていない方で活動のギャップがある。

②現状のような課題を有している要因

○閉鎖的な組織
- スポーツクラブ 21 組織結成要因：補助金がついたため校区ごとに競争意識もあり設置。
- 変えようという意識。新しい参加者を入れようという気があまり感じられない。
- 自身の積極性のなさ。サークルは閉鎖的なもので、他人は加入しにくい。

○参加への配慮不足
- 町全体の体育行事に各集落ごとの行事が日曜日で重なって実施されていない。
- プールなどを利用するとその効果が短期間で体験できるか

○維持管理費用の問題
- スポーツ施設のメンテナンス経費を支出する財政的余裕がない
- 両町の施設（例えばグリーンエコー笠形、桜花園、ピノキオ館、ホテルモンテローザ、こっとん亭、峰山）補助金カット？維持管理、どうするか。

- 施設へのアクセスが悪く、平日の利用が難しい。娯楽が多様化し、魅力的なイベントがない。
- 利用者も四季を通して活気づくとはいいがたい。今後の利用のあり方を考えねばならない。希望としては観光コースの有意義な利用

○幼児施設は充実

大河内にもほしい

- 幼児のための施設（神崎町ではきらきら館）が大河内には無いのは当局の怠慢？
- 子どもたちが楽しく遊ぶ場が、子ども向きに無いので、豊かな自然を親しむ所がほしい。

- 広報不足？自身の積極性なさ？
- 問題意識をもって暮らしているか（特色づけなどの工夫をしようとしているか）

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○交流が重要
- スポーツ（体育行事）の●は集落体育委員長が責任者で統一されていると思われるが、いかがなものか。
- 我町においても更に交流の力を広げ、継続を期待する。
- 場汁が一方的に偏ることがないよう、交流会場を設営していく。
- 交流する。

○スケジュール等参加への工夫
- 年間の町内行事のスケジュール調整を行い、重複しないようにする。
- 各世代が参加できるように活動を工夫してもらう。
- 補助制度はなくてもスポーツ 21 は今後、地域の中心組織として一元的に継続のこと。各クラブ交流が必要
- 町の歳出の削減に向けて利用価値

交流と組織化が重要

※閉鎖的にならないようにする
（「使えないから使わない」ということがないようにする）

- 農村地域の人々の思考を変え、健康の大切さを訴えること。
- スポーツは健康の貯金ととらえる。（これをＰＲする）

- 必要な施設のみを維持管理

- 幼児のための施設は神崎町と大河内町で共同利用する（新設はしない）
- 現在あるのは大人向きの施設が多く、子どもを育てる配慮が少ないように感じる。

- 莫大なメンテ経費の必要なスポーツ施設は旧町のどちらかに集中する。

- HP での表示。専用広報冊子の発行
- HP での表示。専用広報冊子の発行など活動発表の場をつくる。

- 専門のインストラクターを育てる。（特色づけ）

（幼児施設など）
新しいニーズにあった施設に転換していく
※発想をかえていくこと！（雨天でも使えるような工夫）（ゲートボール例）

【総務文教分科会】

課題の柱２．住民の主体的なまちづくりへの参画

①各地域におけるより具体的な状況

○集落単位では機能しているが町民全体の参画には無力

- 自治組織は集落単位での問題に対しては機能しているが、町全体にかかわる案件に対しては対応できていない。
- 各地域単位で行っている取次ぎを行政が間接的にバックアップできればよいのである。

○特色のない住民参加

- 他市町と似ていたり同じことをしている。

○働きかけ不足

- 行政とは別に地区の区長や協議員が末端の活動を担っている。この自治組織への意図的な働きかけが十分でない。

○財政の問題

- 財政的にも大きな支援を期待しての行事、催しものは限界がある。

○住民広報の問題

- K－NET の充実。

○集落による格差がある

- お金がいらない活動はすでに行っている。

○IT、CATV の活用

○その他

- 消防と自主防災の連携ができると良い。昼間若い人が地域にいない。
- 環境一斉美化運動が定着してきたが、年間１～２回では集落により毎回実施して効果をあげている例あり。
- ノンポリが多い。（non political）
- 交付税、補助金の削減により行財政運営が大変と聞いている。
- 昔バブルで忙しく、今不況で生きるのにいっぱい。
- 行政の想定を上回る地方交付税、補助金等の削減。

②現状のような課題を有している要因

- 行政主体、主導。住民の無関心さが問題。

○行政主導の時代ではない

- 何でも行政がやってくれる、してくれるの時代ではない。何故こうなったかはバブル期に予算をふんだんに盛りやりすぎた結果である。

○組織化の必要性

- 広域的な問題に対して意見を集約できる組織が存在しない。

○行政はアドバイザーに

- 行政はアドバイザーでよい。

○権限委譲を

- 区長等に負担を強いることもあり、利害関係もあることから、余り権限が委譲されていない。

- 標準化するようなシステム
- K－NET の有効活用を推進する。

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

○独自性と競争原理のある活動・組織づくり

- 特色・特産等を生かした独自性のある活動。
- 競争原理の導入。（各自治組織ごと）
- 自分たちの住環境維持や自治区間の課題はまず自分たちが主役になることで解決の道が開けるものである。

○行政との連携
○権限委譲

- 従来は、行政の計画するハード面の「まちづくり」に利害関係のある町民が直接参加していくというパターン。最近は、各地区で進められている「まちづくり」は意味が変ってきた。今後は地域の意志を育てる「まちづくり」を進め、権限を委譲していく。
- 問題の顕在化。地域の枠を越えた組織作りと行政との連携。

- 集落合併の必要性
- リーダーシップの発揮

○広報・敬発

- 行政サービスのうちコンピューターネットワークで対応可能なものはそれに置き換える。
- 大河内町に於ても早急に K－NET の整備を行う。
- 今なぜ町づくりへの参加が必要なのか広報する。（時代は傍観から参加へ）
- 町民、区民に新しい町づくりのポイントを PR することが大切である。今、合併の歩みは住民はどうかかわるか。

- 職員数の適正化。
- 高い分野へ職員をシフトする。又県関連グループへ趣向・転出。
- 機械化近代化〔電子自治体等、情報技術（ＩＴ）を利用して省力化を図る〕

課題１と３
交流がキーワード！

まちづくりのポイントのＰＲ！
意見や参画を得る

【総務文教分科会】

課題の柱３．子どもたちの教育に係る学校・家庭・地域の連携

①各地域におけるより具体的な状況

少子化における様々な問題が生じている

○教育レベル低下の問題

- 少子化での仲のよい子どもが増え、競争力のない自立心の無い子が多くなったように思います。
- 両町において小中学生の教育レベルの低下がみられる

○人間形成の問題

- ゆとりのない子どもたち
- 少子化によって子どもたち同士の連帯感が希薄である
- 車社会で近隣でもお互い会話が少なくなっている
- 犯罪の対応策ばかり。その場、その時期の気休めに終わっている。長続きしない。
- 数少ない子どもが学校から帰れば、すぐ塾とかで、お互いの遊びを通しての人間形成に欠ける。
- 小・中・高あいさつマナー。特に神崎高校の生徒と地域の方の関心度の向上。
- 家庭内の親と子のひずみが孫の登校拒否が生じ、祖母への虐待が始まる。

■遊び体験の変化

- 自然の中で遊んだり、体験できる機会が少なくなっている。
- 地域としての学校との連携がないように思う。
- 都会のカギっ子と同じような状況の子どもが徐々に増加しているように思う。また、遊びが体を使ったものでなくなっている。

○小学校生徒数の減少

小学校における生徒数の減少
大河内町五校の児童数の推移
16 年度 330（168）
17 年度 305（166）
18 年度 285（181）
19 年度 275（184）
20 年度 261（175）
21 年度 252（155）
22 年度 240（146）

○特色のある学校づくりは進んでいる

- 地域色のある学校づくり、行事（良い面も悪い面も）
- 山村留学。山村留学制度（第二小学校）11 回、大変な事業であるが、成果がみられる。
- 学校統合

②現状のような課題を有している要因

- 教育の変化
- ゆとり教育の名の下に充分な基礎学力が要請されていない。

- そこに住む人たちの心の問題。傍観者的
- 交番の留守多い。
- 親、教師と子どものコミニュケーション不足。子どもに対する人格の尊重と、ほったらかし・無関心とのはきちがい。
- 卒業とともに学校とのかかわりがなくなっている。

- 外での遊びの奨励を真剣に考えなかったせいで、テレビゲームに育てられた子どもが増加している。
- 少子化による子ども同士の遊びが減っている。

- 山村留学。高齢化により里親の受け皿がなくなっている。継続困難。

- 行政側とその集落との約条は、文書化されたものがあると思います。公にできないような事柄や、地域エゴむきだしの取り決めも存在する可能性もあり、そんな場合の処理も事前に行政同士の情報交換を性格にしておく必要あり。
- 少子化
- 20 代～40 代の世代の働く場所が少なく、生活の場が他へ流出

③課題を改善していくために必要と考えられる取り組み

- 不便老朽は改良しても、できるだけ今の良い面は残して画一的にしない。
- 学力充実のための教育支出を惜しむべきでない（補助教育の設置費用）

- 地域との関わりの重要性
- 幼児、小学生、中学生との交流を計るだけでなく、高校生やもっと上の子どもとの接点をつくる。

- 大切なのはまず家庭。犯罪もほとんど摘み取れる。警察との連携、情報交換。

- 子どもは学校や家庭が育てるのではなく、地域全体で見守っていく。お年寄りとの交流を深める。

- 親とか社会は言葉や活字ですぐ「感性豊かな人間性を育む子どもの教育」を口ずさむが、本気で子どもたちに接してやっているか。

- 親子で町内の自然・歴史を学ぶ活動を取り入れる。
- スポーツクラブのような学区単位としたコミュニティスクール活動の推進
- 地域や家庭が子どもたち同士で遊ぶことの必要性を感じるように啓発していく。子どもたちが喜ぶ地域の施設の開放や、学生アルバイト等の遊びのリーダーを配置する。

○統合整備の必要性

- 小学校の統廃合を教育委員会サイドで検討願う。
- 将来問題化しそうな案件も見送りせず、各町ごとにすみやかな処理を願う（むずかしいでしょうが）。
- それと不利になりそうな（弱点）情報も公開しておく度量を両町の行政に望みます。
- 合併によりスムーズな小学校の統合
- 児童数の増加により、各自の競争力のアップ（学力、その他）。
- 多人数の中での学校生活により、社会に出てからの順応性がスムーズになる可能性が大きくなる。

○特色ある学校づくりを継承していくこと

- 第１小学校児童の通学安全のため、スクールバス利用（巡回バス）を望む。特に低学年に。
- 第１、第２校区全体で留学制度を維持継続されてはどうか。

○都会留学も必要

- 山村留学だけではなく、地域の子供たちが都会を出て刺激を受けるような都会留学があってもよい。